
恋姫十無双・慶次伝 ~空の彼方に~

RH

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

恋姫十無双・慶次伝 空の彼方に

【Nコード】

N4214X

【作者名】

RH

【あらすじ】

天下の傾奇者、前田慶次郎利益。その彼も齡七〇を越え、隠棲の地である米沢でその波乱に満ちた人生を完うしようとしていた。しかし、天はかの者がこのまま死ぬことを許さなかった。

『花の慶次』と『真・恋姫十無双』のクロス作品です。以前、同名の作品をArcadiaで連載しておりました。本作品は、その再構築版になります。まず、「はじめに」をお読み下さい。

はじめに

本作品は、2010年秋から2011年春にかけて Arcadia にて連載していた同名作品の再構築版となります。

実力不足のため、途中で連載を中止いたしました。

しかしながら、生活によりやく余裕が出たのを機に、改めて書いてみようと思った次第です。

自分のペースで、のんびり書いていければと考えております。

再構築版と述べましたが、話の展開は Arcadia に以前掲載したものに準じる予定です。

細かい部分を追加、または削除するつもりですが、基本的に同じ内容と考えて下さって結構です。

したがいまして、一度 Arcadia で読んだことがあるという方は、改めて読む必要はないかと存じます。

それでもお読みいただけるということでしたら、作者として幸甚に堪えません。

【注意！】

1．クロス作品であるため、両作品に愛着がある方は不愉快な思いをされる可能性があります。

2．作品の舞台は『真・恋姫†無双』になりますが、原作通りの展開にはなりません。

原作キャラの改ざん、原作改変がございます。

3．残酷な表現があります。登場人物が死ぬ可能性があります。

以上の点について「承知しかねる」という方は「回れ右」を推奨いたします。

第1章 慶次（1）

米沢近郊の堂森にある小さな屋敷の朝。

白髪の老人が、朝餉の席に着いた。長身大柄、鶴のように痩せた老人である。その名を、前田慶次郎利益という。

慶次郎はいつものように手を合わせると箸をとった。そしてまた、いつものようにまず漬け物に手を伸ばす。と、箸につままれた漬け物がぼとりと落ちた。

「む？」

もう一度、箸でつまもうとする。しかし、震える箸は、なかなか思う通りに動こうとはしなかった。震え続ける箸をしばし眺めた慶次は、箸を静かに置くと小さくうなずいた。

手を叩く。

「へえ」

下男の与平が顔を出した。三〇歳半ばの小男である。

「すまぬが、膳を下げてくれ」

「へえ？……な、なにかお気に障ることでも」

「いや、どうも食欲がなくてな」

「は、はあ」

慶次郎はそのまま席を立つと、奥の書院へと歩いて行った。納得

のいかない顔をして、与平は膳を下げる。

無理もない。老人でありながら、老人のようではない。それが慶次郎という男である。毎朝、ご飯のお代わりを欠かさぬ男であった。それが、一口も食わずに膳を下げてくれと言つ。与平は首を傾げた。

しばらくして、書院から慶次郎が戻ってきた。

「与平。ちょっと使いを頼まれてくれるか」

「へ、へい。どこまで」

「うむ。直江山城のところまで」

そういうと、慶次郎は封をした手紙を与平に渡す。

「そ、それではすぐに」

「まあ、急がぬともよい。ゆっくりと行け」

「はあ？」

「歩いて行け、良いな」

そう言つと、慶次郎はくるりと背を向けて書院に戻っていった。

与平はそんな主の背中を呆けた顔で見っていた。慶次郎が書院の中に消えると、慌てて頭を下げて屋敷を出ていく。

米沢の中心地にある直江山城守兼続の屋敷まで、この堂森の屋敷からは歩いて半刻（一時間）ほどである。

書院の中に、慶次郎は座っていた。白装束である。座ったまま、

書院の中を見渡した。

目の前の壁には、朱槍がかかっている。
鉄筋の入った、特製の長槍である。

もう、それをふるうだけの膂力はない。

右後ろの壁には、大きな鎧櫃が二つ。

河原田城の戦いでまとった、黒く焼きの入った南蛮鎧が入っている。

もう、それをまとうだけの体力はない。

左後ろの床の間には、三尺二寸五分厚重ねの長刀が飾ってある。

優美さとはかけ離れた、戦でしか使えない剛刀である。

もう、それを腰に差すことはないだろう。

左の脇には、大きな骨壺がある。

その中には、愛馬松風の骨が入っている。

彼女が逝って、もう五年が経つ。

目の前には、酒の入った大きなふくべ。

そして膳に乗ったおちよこが二つ。

直江山城が来れば、末期の酒を飲むことになるだろう。

慶次郎はいくさ人である。すなわち、死人である。いつ、何時でも死ぬ準備はできていた。それがたまたま、今日であったというだけである。

齢、七十三。生きるだけ、生きた。後悔はない。この時を、待っていたような気もする。

あの世で、自分を手ぐすね引いて待っている奴らも多いだろう
そして、女たち。

つい、口がにやけてしまう。あごをつるりを撫でた。

「む？」

ひっかかりがある。髭の剃り残しがあるようだ。無精髭のまま、
女たちに会うわけにはいかぬ。慶次郎はそばの小箆筥から、小刀と
古い手鏡を取り出した。

黒鞘の小刀の柄には、龍の透かし彫りが刻まれていた。直江山城
から贈られた品である。手鏡は京にいた頃、道ばたの古物商から買
ったものであった。

左手で手鏡を、右手で小刀を持つ。手鏡には、白髪の老人が映っ
ていた。

何か、心にひっかかるものがある。

何であるう。

自分の顔を見て、思い出されるもの。

はて、この白髪頭に……。

「うむ」

慶次郎は苦笑した。何のことはない。慶次郎は養父、前田利久の
顔を思い出したのであった。血はつながっていないなくとも、やはり親
子。顔は似るものかね。そんなことを思いつつ、心のひっかかりの
理由を探す。

はて、親父殿は死ぬときに何とおっしやられたのであったか……。

「おお」

思い出した。

親父殿は無念の人であった。最後まで、叔父の利家殿に荒子の城を取られたことを悔やんでいた。それは、おのれのためではなかった。愛する息子、慶次郎がその大器を納める場所を、自らの無力さによってなくしたことへの悔やみであった。

利久は酒を飲むと、決まって慶次郎にこう言った。

「お前が城持ちの武将であったなら、大名となることも夢ではなかったのに」

慶次郎は、そんな利久の話をいつも苦笑しながら聞いていた。自由が好きな男である。城持ちなど、面倒くさいことは御免被る。正直、叔父がその役割を代わってくれたことに感謝すらしていたのだ。

そして、親父殿の最後の言葉は　。

「お前が大名となった姿、見てみたかったな」

その言葉を、自らの死に際に思い出すとは　親父殿の心残りを、投げっぱなしにしていたことが心に残っていたか。

いやはや、これまでまったく失念していた。あの世で、どんな言い訳をすれば良いかね。苦笑する慶次郎の右手が、あらぬ方向に動いた。

一筋の血が、手鏡に落ちる。

「いかん、いかん」

小刀をおいて、手鏡の血を白装束の袖でぬぐう。と、手鏡が白く光り出した。

「なんと？」

光はますます強くなる。もはや、目の前は真っ白だ。慶次郎は急に前屈みになった。

光の中、手鏡があるとおぼしき場所に身体が吸い込まれている。手について身体を押さえようとしたのも束の間、慶次郎は意識を失った。

「慶次殿！」

直江山城守兼続は、書院のふすまを開けると部屋に飛び込んだ。

与平から渡された手紙には、末期の酒の相手を頼む旨が書かれていた。それを読んだ兼続は屋敷を飛び出し、馬に乗って全力で駆けしてきたのである。

着いてみると、堂森の屋敷は静かだった。人の気配がしない。すぐさま兼続は異変を察し、慶次が待つと書いていた書院へと向かったのである。

しかし、そこには誰もいなかった。
いや、何も「なかった」。

まるで引越をした後のようである。

ただ、部屋の中央に膳に乗ったおちよこが二つあった。
確かに、慶次郎はここで待っていたのだ。

兼続はおちよこを一つを手にとると、縁側の外を見た。

青い空がどこまでも続いていた。

第1章 慶次(2)

空が、広い。

それが第一印象であった。気がつけば、大の字になっていたようだ。

起き上がり、あぐらをかく。右手が何かを握っている。愛用のふくべであった。他には何も無い。慶次郎はとりあえず、ふくべの栓を抜くと一口飲んだ。

「うまい」

にんまり笑うと、辺りを見渡した。ここはどこだろうか。あの世かとも思ったが、違うようだ。なぜなら、誰もいないからだ。

ここがあの世界なら、刀槍を持った連中に囲まれているはず。または、女どもが抱きついてくるはずなのである。

慶次郎はもう一口、ふくべを口に運んだ。そして穏やかな口調で言った。

「止めておけ」

慶次郎の後ろに、槍を持ち黄色い鉢巻きをした男が三人立っていた。

ここではとりあえず、その身体的特徴から名前をつけておこう。背の高いノツポ、太っているデブ、そして小柄なチビ。

三人は小沛の街で聞いた噂をもとに、街から三里（約二km）ほど離れたこの地をうるついていたのである。

そこに、空から白い光が流星のように「落ちてきた」。そして光が消えると、大柄な男が大の字になっていた。男は、しばらくするとこちらに背を向けて起き上がった。

こいつが噂の「天の御遣い」か。どんな奴かはわからんが、天から来たのだ。何かしら、金目のものを持っているはず。

背後から近寄ったノツポは、槍を構えた。そして背中からぶすりといこうとしたその刹那、その男は言った。

「止めておけ」

絶妙のタイミングであった。一瞬、動きが止まる。その男は続けて言った。

「見ての通り、丸腰じゃ。何も無いぞ」

そしてくるりと身体を向けると、破顔した。

笑顔だが、そう笑顔だが　もう、槍をつける気持ちはなくなっている。

笑っている、笑っているのだが　まるで、猛獣が牙を見せているような。

「けつたいな格好をしとるのう。元気なのはいいが、老人を敬まわぬか」

「へ……」

そして笑顔のまま、また言った。

「止めておけ」

ノツポは、我に返った。

怖い。

怖い、何だか怖い。このままでは、殺される。

相手は無手であったが、そんな確信があった。慌てて槍を構え直す。

頬に冷たい感触がした。

冷たい？……と、鋭い痛みが追ってくる。

一筋の血が流れ出す。頬には、後ろから差し出された槍の穂が当たっていた。

「もう一度言っぞ。止めておけ」

「おかしなことを。この者は、あなたの命を狙っていたのですぞ」

若い女性の声だ。

ノツポは振り返ることができない。デブとチビは慌てて振り返った。そこには、ノツポの頬に槍の穂を当てたまま、涼しげな顔の妙齡の女性がいた。白い装束を着ている。

「狙われた者が良いといっているのだ。槍を戻さんか」

「しかし」

「しかし、ではない。戻せ」

慶次郎は笑顔のままである。

女性は渋々と槍を戻した。

ノツポ、デブ、チビは何をしたら良いものやらわからない。槍を手にしたまま、目を泳がすばかりである。

「おい、おぬし等」

慶次郎がにこにここと笑いながら、三人組に声を掛ける。

「へ、へい」

もうだめだ。三人組は武器を捨てて平伏する。そんな彼らの頭上から、その怖い男の声がした。

「酒でも飲まんか？」

「はあ!？」

思わず、ノツポは顔を上げる。そこには、ふくべを突きだした笑顔の男がいた。

「なるほどな、おぬしらは黄巾賊というのか」

「へ、へい。そう呼ばれております」

「なんで黄色の布なのじゃ？」

「え、ええと何だっけ、そうそう……」

慶次郎はふくべを三人組に回すと、改めて自分も一口飲み、質問し始めた。

最初は戸惑いを隠さない三人組であった。しかし、慶次郎が目をきらきらさせながら聞いてくるものだから、何だか楽しくなってしまう。気がつけば、慶次郎と三人組は車座になって話に花を咲かせていた。

そんな慶次郎の後ろに、槍を持った女性が立つ。

「天の御遣い殿」

「で、なんで信者になったのじゃ」

「信者になりたかったというより、食うためですかねえ」

「食うため？」

「へえ。うちの村は、お上の連中に根こそぎ食い物を持っていかれてですね」

「ふむ」

「もう死ぬしかないってときに、黄巾賊に入れば少なくとも食い物には困らないと聞きました」

「ほうほうほう」

「でも、結局はこんな有様で……」

「天の御遣い殿！」

「何じゃ、うるさいのう……」

慶次郎は振り返る。そこには、顔を真っ赤にした女性が立っていた。

「そもそも、天の御遣いとは何じゃ？」

「あなたのことですよ！」

「わしのこと？」

慶次郎は怪訝な顔をする。

と、女性は槍を置き、片膝をついた。

「申し遅れました。私は常山郡真定県出身、名を趙雲、字を子龍と申します。天の御遣い殿が現れるとの予言を受け、お探ししておりました」

「趙……雲？」

慶次郎はまじまじとその女性の顔を見た。

慶次郎が三人組と酒を飲み始めたのは、無論、酒が飲みたかったのが第一の理由である。

どこまでも広がる青い空。

どこまでも広がる平原。

なんともうきうきしてしまったのである。

それと同時に、今自分がどこにいるのかを知りたいという気持ちもあつた。そして話を聞いている内に、どうやらここが中国らしいことがわかつた。今が後漢といわれる時代であることも。

慶次郎は、当代一流の文化人でもある。漢語の読み書きは当然のたしなみであつた。直江山城の屋敷で、史記や後漢書、三国志などの正史を読んでいた。そして黄巾賊という名を聞いて、ピンと来たのである。

慶次郎はいくさ人である。つまり、徹底した現実主義者である。そして目の前の現実から、どうやら後漢末に自分がいるらしいと結論を出した。とりあえず、それが現実でよい。そこに、驚きはない。

だが 目の前の女性は何だ。

趙雲といえは、三国志の英雄。蜀の五虎將軍として知られる『偉丈夫』ではないか。それと、この妙齡の女性はつながらない。

「それがおぬしの名か」

「いかにも」

「それは失礼した。わしは前田慶次郎という」

「前田……どの」

変わった名前ですね とつぶやく趙雲に対して、慶次郎はにっこり笑って言った。

「そう、前田慶次郎。天の御遣いなどではない」

「いや、あなたは天の御遣いだ」
「しつこいのう」

苦笑する慶次郎に、ノッポが言葉を継ぐ。

「旦那。実は、『白き天の御遣い、小沛の東に白き光と共に現れる』
という予言がありました」

「予言？」

「へえ。とにかく予言が当たる管輅という占い師がいるんですが、
その占い師が予言したんです」

「む、だからお前等もここにいたのか」

「ご明察で」

慶次郎は頷くと、趙雲に向き合った。

「しかしだね、こんな老人に天の御遣いをさせるなど、ちょっと人
使いが荒くないかね」

「老人？」

趙雲が目を丸くする。

「老人、とおっしゃられたか」

「いかにも」

「私には、どう見ても二〇代にしか見えませぬ」

慶次郎は怪訝な顔をして、趙雲の顔を見る。嘘をついている顔で
はない。振り返って三人組の顔をみる。

三人組はうんうんとうなずいた。

そういえば、手鏡はどこにいったのだ。そんなことを考えながら、慶次郎は右手で髪の毛を引き抜く。

そこには、黒光りする硬そうな髪があった。

第1章 慶次(3)

慶次郎は、改めて自らの身体を見た。なるほど、どうやら老人の身体ではない。うきうきしていたのは、どうやら気分のせいばかりではないらしい。身体そのものが元気なのだ。

左の袖をまくる。そこには丸太のような腕があった。慶次郎はまゆをひそめた。そこには鉄砲傷。これは、長谷堂の戦いで受けたもの。

ということは……。

二十代の自分の身体に魂が戻ったというよりは、七十三歳の自分が若返った身体である、と考える良さそうだ。

「すごい傷ですね」

慶次郎の腕をまじまじと眺めていた趙雲がつぶやく。鉄砲傷以外にも、縦横無尽に走る刀傷、槍傷。それらはまるで模様のようにも見えた。

慶次郎は、そんな趙雲の顔を見た。思いのほか幼い。恐らく、十代の後半、または二十代の前半であろう。

無言で袖を戻すと、慶次郎はノッポの槍を手にとった。そしてにこりと笑うと、趙雲に向かって言った。

「さて、趙雲殿。せっかくの機会じゃ。軽くお手合わせ願えないか」

あどけない表情をしていた趙雲の顔が一気に引き締まる。

三人組はあ然とした。

「本当によろしいのですか」

「かまわん」

「はあ……」

趙雲は困惑していた。

相手は、まるで棒きれのような槍を持っている。彼女の愛槍である龍牙を当てれば、ひとたまりもなく折れてしまうのではないか。しかも、酒を飲んでいる。

たしかに、大きい。しかし、図体がでかい男というものは、そうじて動きが鈍いものである。そして、概して『男性は女性に劣る』。少なくとも、『この世界では』そうである。

いかに天の御遣いであるとは言え、簡単には負けない自信もあった。

この人は天から来たばかりで、私のことを知らない。『常山の趙子龍』と呼ばれ、知る人ぞ知る存在である自分のことを。

ここは、軽くうちのめして自分の価値を知らしめるのも一興。

「条件はそうだな……戦闘不能になったら負け、というのでどうだ」
「……………」

「ん？どうした」
「いえ」

腹が立った。

そんなにもなめられているとは。

そもそも、この人は本当に天の御遣いなのか
手加減できるだ
ろうか。

「おいノツポ」

「へ、へい」

「お前、審判な。勝負がついたら止める」

「わ、わかりやした」

慶次郎はふくべをノツポに向けて放り投げると、趙雲と向き合っ
た。

「それでは始めようか」

慶次郎が言うと同時に、趙雲は突っ込んだ。
神速である。

一気に決めるつもりであった。
が、すぐさま後ろに飛んだ。

< な、なんだ…… >

目の前の男の雰囲気が一変している。

まるで、野生の虎に出会ったかのようだ。

一見隙だらけのようにみえて、まったく隙がない。

やはり、この人は天の御遣いなのだろう　しかし！

飛び込む。

もう、手加減する気持ちはさらさらない。

神速の槍を、慶次郎の急所目指して突き込む。

ここに至っては、間違つて殺してしまつてもやむなしと思つてい
る。

しかし、当たらない。

棒のような槍で、受け流されている。

そして、慶次郎はじつとこちらを見つめている。

冷や汗が止まらない。

<ふむ、これは真に趙雲であつたか>

慶次郎は考える。彼は趙雲の槍さばきのすさまじさに、内心驚いて
いた。これほどの槍の使い手に出会つたのは、戦国の世でも両手
の指で数える程。しかも、これが妙齡の女性なのである。

となると、これは慶次郎の知っている三国時代ではない。似てい
るが、別の世界と言つことだろう。

慶次郎は趙雲の槍をさばきながら思う。

天は。

天は、自分に何をさせようとしているのだろう。

このような、まるで、おとぎ話のような世界で。

きん。

槍の刃が合わさった音がして、趙雲が後ろに飛んだ。そのまま、二十歩程離れて立つ。

息が弾んでいる。

しかし、目は燃えるようだ。

必殺の一撃が来るか。

何とも分かりやすい 若いのう。

「はっ！」

趙雲は裂帛の気合いと同時に目にも止まらぬ速さで、駆けだした。そして、慶次郎から十歩離れた場所で急に腰をかがめた。

それにつられて目を落としたノッポの目の前から、趙雲が消えた。

慶次郎はその視線を上に向ける。彼女は空中にいた。そして、全力で龍牙を投げつけようとして。

「何！」

彼女の目は、慶次郎が槍を捨てたのをとらえた。無手の相手に槍を投げるのか だが、もう止まらぬ！

趙雲は考えることを止め、ただ全力で槍を投げつけた。

「わしの勝ちだな」

地面に降りた趙雲の首筋に、槍の穂が当てられた。それはノッポの槍ではない。趙雲の龍牙である。

慶次郎はノツポの槍を捨てるやいなや、飛んできた龍牙を掴んだのである。心臓を狙っているのが一目瞭然であったから、それを掴むのはさほど難しくなかった。

そしてそのまま、くるりと槍を返すと趙雲に向けたのである。

「私の……負けです」

次に来る痛みを予感しつつ、趙雲は答えた。

全力であった。最後は捨て身の技だった。しかし、まったく届かなかった。

がつん。

「あいた」

趙雲が頭を挙げると、そこには自分の槍の柄があった。慶次郎が、何をしてるんだという顔でこちらをみている。慌てて、槍の柄を掴んだ。

「流石は常山の趙子龍。神速の槍の使い手。感服いたしました」

慶次郎が頭を下げる。つられて、趙雲も頭を下げた。

「あ、あの……私のことをご存じでしたか？」

「うむ、知っている。この国に並びたつ者がない、槍の使い手である」と

「……しかし、あなたには負けた」

「手合わせをただけよ。いくさではない」

からからと慶次郎は笑うと、ふくべをノッポから受け取って口を付けた。そして、趙雲に渡す。

「一口、どうかね」

「い、いただきます！」

趙雲はふくべに口を付ける。芳醇な香りが口内に漂った。

「このような酒、初めてですぞ」

「む、そうか」

「お返しと言ってはなんですが……」

趙雲は乗ってきた馬に戻ると荷物から小さな壺を取り出し、その蓋を開けた。そして慶次郎に差し出す。

慶次郎はその壺を受け取ると、その中身を無造作にひとつかみ、口に放り込んだ。

「これはうまいな……」

「メンマと申します」

「いや、これは初めての味だ」

もりもりと食べる慶次郎。そして振り返ると、黄巾賊の三人組に声を掛けた。

「おぬしらもどうだ！」

「あ、それは、その、特別な」

趙雲は慌てた。秘蔵のメンマなのである。しかし、慶次郎の笑顔にダメとは言えない。

「ん？どうした？」

「ええい、どうぞ存分に食べて下され！」

「いや、恩に着る」

にこにこしながら、慶次郎は三人組のところに歩いていった。

なんて人だ。

負けたのに、悔しくない。殺し合ったのに、すがすがしい。

自分を殺そうとした相手と、まるで昔からの友のように酒を飲んでいる。

この人は、きっと天の御遣いだ。

いや、そうでなくとも。

趙雲は一人うなずくと、慶次郎の背中を追いかけた。

第1章 慶次（4）

慶次郎は困っていた。この男を困らす状況など、なかなかあるものではない。しかし、困っていた。とても、困っていた。

あぐらをかいた慶次郎の前には、土下座をしている四人。趙雲と黄巾賊の三人組である。

慶次郎は、再度同じ言葉を繰り返す。

「いや、だからな。その、真名とやらを受け取るわけには……」
「……何とぞ！」「……」

四人が言葉を繰り返す。

「いや、だからな……」

趙雲が土下座したまま、その背後で同じように土下座する三人を振り返る。

「いいか！もう一度だ！大きな声で！」
「……へい！」「……」
「……」

無言になる慶次郎の前で、四人は再度言葉を繰り返した。

「……何とぞ、真名を受け取って下さいませ！」「……」

慶次郎は空を仰いだ。

なんでこんなことに……。

半刻（一時間）程前のこと。ふくべが空になったのを機に、趙雲は姿勢を正すと慶次郎の前に座った。

「前田殿」

「うむ？」

慶次郎は、空になったふくべを逆さまにし、最後の一滴を飲むとしていた。そんな慶次郎の顔を見つめながら、趙雲は問う。

「お名前を、正しく教えて下さいませ」

「ん？ああ。『こちら』ではわかりにくいかもな」

慶次郎はふくべを懐に入れると、指で地面に自らの名前を書いた。

前田慶次郎。

まあだ、けいじろう　と何度かつぶやいた後、趙雲は慶次郎に
正対する。

「前田慶次郎殿。先程の勝負、真に感服いたしました」

「いやいや。勝負は時の運。趙雲殿の槍さばき、実に見事であった」
「それで、その……」

趙雲の顔はいつの間にか真顔になっていた。先程までの薄く桃色に染まった酔い顔が嘘のように、その顔は白磁のごとき端正さをもつて慶次郎に迫る。

「ん？どうした？」

慶次郎は、そんな趙雲に顔をずつ、と近づけた。趙雲の顔は一瞬で真っ赤になり、身体ごとさつと後ろに跳ぶ。そして首をぶるぶると振ると、改めて慶次郎を見据えて声を張り上げた。

「ま、前田慶次郎殿！」

「う、うむ」

思わず、姿勢を正して頷いてしまう。

「私の武技を一顧だにせぬその技量。そして、それを誇らぬその度量 惚れ申した！」

「な？」

「しからは、お願い申し上げます。私の真名を受け取って下さいませ」

「真名？」

「私の真名は『星』と申します。これからも、よしなに」

そう言うと、星はその頭を小さく下げた。

何だか、告白されているようだ そんなことを考えながら、慶次郎は答えを返そうとする。

「趙雲殿。その……」

「ちよいとお待ちを」

「何じゃ？ノツポまで」

気がつけば、黄巾賊の三人組も慶次郎に向かって姿勢を正して座

っている。ノツポがその左右に座るデブ、チビの顔を見た。彼らが頷くのを確認すると、ノツポはやはり星と同様に真剣な面持ちで言った。

「わしらも、旦那に惚れやした。是非とも、真名をお預けいたしたく」

慶次郎は腕を組み、静かに目をつぶった。四人は、その返答を待って息を止める。

しばらくして慶次郎は目を開けた。そして、声を発した。

「真名って何じゃ？」

「……は……？」

慶次郎以外の四人の気持ち、初めて一つになった瞬間であった。

「……ですから、真名というものはとても大切なものなのです」

「ああ、わかった。わかった。存分にわかった」

「いや、慶次郎殿はわかっておられぬ。私が、いや、われらがどれだけの覚悟で……」

星が真名について説明し始めて、四半刻（三〇分）が過ぎようとしていた。慶次郎は、助けを求めるように三人組に目を向ける。三人組は申し訳なさそうに、首を振るばかりである。いつの間にか、星は慶次郎を「慶次郎殿」と呼ぶようになっていた。

星の話を聞いて分かったのは、真名はそう簡単に人に預けるものではないこと。よほど相手に惚れ込み、信じられた場合にのみ、打ち明けるものであるという。

日の本における「諱」^{いみな}によく似ている。しかし、心許した人々の間では通常使われるということであれば、一種の愛称に近いようにも思われた。

「本当にわかっているのですか！そもそも真名というのは……」

また繰り返そうとしている。もしかして、酔っているのだろうか。日本の酒は初めてだろうし、酒量を誤ったのかも知れぬ……。そんなことを思いながら、慶次郎は星に問う。

「ということは趙雲殿。おぬしはわしに惚れたということか？」

「はい。そう申し上げました」

「しかしだな、会ってすぐに惚れたと言われてもだな」

「ふ、愚問ですな」

星は腕を組んで慶次郎を見上げた。星の背丈は、慶次郎よりもずっと低い。見上げるその姿は、何とも得意げに見えた。

「先ほど申しましたように、私は慶次郎殿に同じ武人として惚れたのです。僭越ながらこの趙子龍、諸国を巡り歩き見聞を重ね、人を見る目はそれなりに養ったといささか自負しております。ましてや、慶次郎殿は天の御遣い。真名をお預けすることに、何の異存がありませんよう」

「その割には、ずいぶんと顔を赤くしていたではないか」

「な………！」

星は目に見えて狼狽した。組んでいた腕を外すと、よろよろと後ろにたたらを踏む。

「そ、それは、慶次郎殿が急に顔を近づけたりするから！」

叫ぶようにそう言うと、星はきつ、と慶次郎を睨んだ。

「……もしや、私が女性として慶次郎殿を慕い、真名をお預けしたなどと勘違いなさっているのではあるまいな？」

「わかつておる、わかつておる、十分にわかつておる。勘違いなどしておらぬ。ただの冗談じゃ。だから、そう怒るな」

「……」

「……どうした？」

「……いや、それはそれで腹が立つというか」

「何？」

「この気持ち、何でしょう。初めてです」

「？」

慶次郎は首を傾げる。

星も不思議そうに首を傾げた。そしてしばし黙考すると、やにわに槍を逆手に持ち、槍の柄で慶次郎の頭を軽く叩いた。

ぼこん。

「……何をするのじゃ」

「いや、よくわかりませんが、こつすると何やらすつといたします」

星が口元に笑みを浮かべている。鼠を見つけた猫の顔だ。その顔は、ほんのりと赤い。

「……おぬし、やはり酔ってるな」

「それでは、もう一度」

「待て！」

「待ちませぬ」

慶次郎は駆けだした。その背中を怒っているような、それでいて喜んでいような顔の星が追いかける。

どちらも本気ではない。戯れである。いずれにせよ、妙齡の女性が振り回す槍から逃げ回る大男の姿は、いかにもおかしかった。

その姿を見て、黄巾賊の三人組は笑った。久しぶりに、腹の底から笑った。

そして、冒頭の光景に戻る。星は顔を地面に伏せながら、涙声で訴えた。

「……なぜ、われらの真名を受け取って下さらぬ。なぜ、主従としての誓いを拒まれるのか」

星は顔を伏せたまま、右手で顔を拭った。

気が済むまで人の頭を叩いておいて何を言う……ん？いつの間に主従としての誓いまで そんな慶次郎の気持ちとは裏腹に、黄巾賊の三人組も「趙雲殿の言つとおり」とばかり、しきりにうなずいている。

「われらには……慶次郎殿にお仕えする価値がないということですか」

「いやいや、そういうわけではなくてな」

「だったら、なぜ!」

星が顔を上げた。怒り心頭といった感じである。星からすれば、それだけの覚悟を持って預けた真名であった。それをあっさり拒否されるとは、自分の価値がくびられたような、そんな憤りもあった。

やはり、先程の涙声は嘘泣きであったか。食べぬおなごだ。そんなことを思いながら、慶次郎は頭をかく。

やれやれ。

「勘違いするな。価値がないのは、わしじゃ。わしに、その価値がないからよ」

「何をおっしゃる! 慶次郎殿は、私に勝った! 負けて言うのも何ですが、私の技量はかなりのもの。それを赤子の手をひねるように相手された慶次郎殿はまさに万夫不当! お仕えするのにこれ以上の方はおりませぬ!」

「星よ」

「……はい!」

真名を呼んでくれた。そのことに喜びを感じたのも束の間、星は息を呑んだ。いつの間にか、慶次郎が真顔になっている。

「わしは、強いだけだ」

「は?……」

慶次郎は続けて言う。

「強いだけでは主はつとまらぬ。理想だけでは主はつとまらぬ。主とはつまるところ、自らを慕うものたちを飢えさせぬ力を持つものことよ」

「……慶次郎殿？」

星の問いかけには答えず、慶次郎は空を見上げた。いつしか日は西に傾き、空はうつつすらとあかね色をさしている。

友はいた。皆、戦乱の世を独りで生き抜く力を持った、類い希なる漢たちだった。

だが、部下はいなかった。

独りでは生きていけない　　そういう存在と関わることを、恐れていたのかもしれない。

守るべき存在が増えることを、疎んでいたのかもしれない　　自由で、いたかった。

なあ、親父殿。やはり、わたしには大名など無理なんじゃないか。

そして叔父御　　利家殿。あんたは、本当に偉かったな。

「異国に来たばかりのこのわたしに、そのような力はない。おぬしらが真名とやらを預けるような、ましてやおぬしらの主たるような価値は、今のわたしにはないのじゃ」

「慶次郎殿……」

「いや……今までもなかったのかもしれない」

そう言う慶次郎の顔は、星には見えなかった。

第1章 慶次(5)

黄巾賊の三人組は、慶次郎に頭を下げた。

「旦那、どうもお世話になりやした」

「わしは何もしておらん。こちらこそ、いろいろと教えてくれて助かった。礼を言う」

慶次郎が頭を下げる。三人組も、慌ててもう一度頭を下げた。

星は慶次郎の後ろに一步下がって立っている。そして、半刻(一時間)前の慶次郎と三人組のやりとりを思い出していた。

結局、慶次郎は四人から真名を受け取らなかった。いや、星からは強制的に受け取らされている。既に聞いてしまったし、その名で呼んでしまった。しかし、それ以上はどうしても真名を受け取るうとしなかった。

そして星も含めて、彼らが慶次郎の下につくことを認めようとはしなかった。そんな慶次郎に、ノツポは恨み言を言った。

「結局、旦那みたいな偉いお方には、わしらみたいな野盗崩れは用なしってことですかい」

「あ、兄貴！」

デブが慌ててノツポを抑えようとする。その腕を振り払って、ノツポは続けた。慶次郎の顔が見れない。地面を見つめながら、口か

ら呪詛がこぼれていく。言ってはいけない、そう思いながら止まらない。

「どうせ、わしらは虫。しかも、害虫ですからね」

「おい」

慶次郎の声が出た。顔を上げた。目の前に火花が飛んだ。何だかわからなかった。しばらくして、慶次郎にビンタを食らったことに気づいた。

「な!……」

つつかろうとするノツポに、慶次郎は静かに言った。

「なあ、ノツポ」

「お前、虫をきちんと見たことがあるかね」

「虫は全力で生きてるぞ。どんなときも、生き抜くために必死だ。そうして命をつなぎ、子どもにその命を伝えていく」

「わしはな。生きることが一番素晴らしいことだと思っている。生きていれば何でもできる」

「後悔することも、それを乗り越えることも」

「……だ、旦那」
「お前は確かに虫かもしれんな。だが、わしもまた虫じゃ。虫同士じゃ。どちらが偉いかなんて、関係あるものかよ」

そう言うと、慶次郎は頭を下げた。

「お前のような部下がいれば、わしも心強い。しかし、今のわたしはその力はない。お前を養えん。お前が、わしに抱いている何かを、今のわたしには実現できん。……すまん。だから」

頭を上げると、慶次郎は照れくさそうに横を向いた。そして、アゴをかきながら言う。

「わしにその力がついたら、訪ねてこい。そのときは、第一の部下にしてやるぞ」

「だ、旦那！」

「……慶次郎殿。私の立場は？」

「おぬしは、わしの女ということかどうかじゃ」

星は口を開けたまま固まった。その顔を見て、慶次郎はノツポの耳に口を寄せる。

「……冗談、また通じなかつたかのう」

「旦那。逃げた方が良くと思います」

慶次郎が振り返ると、そこには笑顔を浮かべて槍を振りかざす星がいた。

三人組が振り返り、振り返り離れていく。慶次郎はその度に、律儀に手を振り返す。その頭には、大きなたんこぶがある。

その隣で、星は慶次郎に問うた。

「さきほどの件、本気ですか？」

「ん？おぬしをわしの女にするということか？」

「……もう一つ、たんこぶを増やしたいのですか？」

「断る」

「まったく……」

ぶすつとした顔で、星は言う。

「彼らを部下にするということですよ」

「さあて、な」

「そもそも、あなたはこれからどうするおつもりで」

「さあて、な」

三人組が、また振り返る。

慶次郎は笑顔で、大きく手を振る。

星はため息をついた。

そんな星に、慶次郎は言う。

「天が」

「天が？」

「決めるだろうさ、そんなこと」

「天が……」

星は、空を見上げた。

慶次郎たちの姿が、地平線の向こうに消え去った頃。三人組は、小沛から見て東にある故郷の村に向けて急いでいた。すでに日は落ちかけ、夕日が彼ら三人の大きく長い影を作っている。

もう、黄巾賊に戻るつもりはない。それより、荒れ果てた故郷の村を、自分たちの手で元に戻そうという意気込みに燃えていた。

自分たちは虫かもしれない。それでも、村の子どもたちのために、できることがあるはずだ。慶次郎の言葉を思い出す。自分たちが死んだ後でもいい、彼らが笑えるように、喜んで虫として死んでいこう。

そして、機会があつたなら、もし旦那が国を建てたなら、そのときは……。

「ん？」

ノツポは空を見上げた。空が白く輝いている。まるで、旦那が現れたときのよう……。と、空から白い光が流星のように『落ちてきた』。そして光が消えると、若い男が呆然と座っていた。その服は、夕日を浴びてきらきらと白く輝いている。

あの男も、天の御遣いだろうか。

きよろきよろと辺りを見渡している。

無理もない。不安なんだろう。

しかし、大丈夫。旦那がいる。

きっと、旦那と同じ場所から来たんだろう。じゃあ、仕方ないな。旦那のところに、連れて行ってやる。仕方ない、仕方ない。

もう一度、旦那に会える。そう思うと、ノツポはうれしくなつた。デブとチビの顔を見た。すぐにわかった。こいつらも同じ事を考えている。

もう、のんびりしていらなかった。三人は若い男に向かって全力でかけた。槍を持った手を、ぐるぐると振る。

「おーい！」

若い男が、こちらに気づいた。夕日に照らされたその顔は、引きつっている。座ったまま、必死で後ずさった。

む、コイツ、もしかしてオレたちを……。

そこで、ノツポの意識はとぎれた。

どうしたのだ……。
いったい、何が……。

ノツポは鉛のように重いまぶたを開ける。視線は地面の上だ。目の前に、デブとチビが倒れている。

わかる。

助かるまい。

そのくらいは、わかる。

わかるくらいには、殺してきた。

視線を移す。若い男の前に、黒髪の若い女性が片膝をついている。その隣には、血に濡れた青龍刀のようなものが あれで切られたのか。その女性の後ろには、桃色の髪の毛のやはり若い女性、そして子どものような体躯の、槍のようなモノをもったやはり若い女性が立

っていた。

野盗か何かと、間違われたか。

よりによって、人を助けようとして……。

慣れないことは、するもんじゃねえ……な。

……これも天罰……なの……か……。

ノツポは、デブとチビに目を移した。彼らの顔は、既に土気色になっていた。見れば、肩から腹にかけて一直線に大きく鋭利な傷口がある。何とも見事に斬られたものだ。恐らく、自分にも同じような傷口があるのだろう。しかし、もはや何も感じなかった。

とりあえず……こいつらと一緒に死ねる……。

虫にしては、ましな死に方……。

……ねむ、い。

寝て、しまおう……。

ノツポのまぶたが閉じかけたとき　チビがつぶやいた。

「そ、そらの」

デブが反応した。

「そ、そらの」

ノツポが続けた。

「かなた、へ」

三人組が別れを告げる前。星が「ちょっとお待ち下され」と赤い顔で林の中に消えていった。だいぶ飲んだし、そういうことだろう。ふと、ノツポは聞いてみた。

「旦那は、これからどうするつもりなんで」「うーん」

慶次郎は、頭の後ろに手を組んだ。

「わからん！」「わからん？」「いや、わかっているような、わかっていないような……わしも悩んでいる」

ノツポは少しうれしくなった。旦那ですら、悩む。

「だけどな」「はい」「いつの日か、必ずやってみたいことは、ある！」「はい」「見る！」

慶次郎は両腕を大きく広げると、周りをぐるっと見渡した。ノツポにとっては見慣れた風景である。そして、吠えた。

「空が果てしなく続いている！地が果てしなく続いている！どこまでも行ける！」

「どこまでも……」

「ここならば！わしは全力で……どこまでも行けるだろう。この命

が尽きるまで、前に進めるだろう」

「命尽きるまで……」

「そう、わしは空の彼方まで行ってみたいのじゃ!」

慶次郎は目をキラキラとさせている。ノッポは思う。この人ならば、行ける。きっと、空の彼方まで行ける。

「そ、そのときは」

「ん?」

「わしも、わしもついていっていいですかね?」

ノッポが夢見るような顔でたずねる。慶次郎はにっこり笑った。

「応ともよ!」

「わ、わしも!」

デブが続く。

「オ、オレも!」

チビも続く。

「応!」

慶次郎は答えた。そして四人は、笑った。地平線を眺めながら、指さしながら、笑った。

北郷一刀は、何が何だかわからない状況にあった。

寮のベッドにダイブしたつもりが、気がつけば見知らぬ場所にいた。そして野盗のような三人組が現れたかと思うと、いきなり槍を振り回しながら迫ってきたのだ。彼らは夕日を背にしていたから、その表情はわからなかったが……。

必死に逃げようとしたその刹那、背後の森から飛び出してきた長髪の美少女が、あっという間に彼らを切り伏せたのである。間一髪だった。

野盗たちはびくびくと動いている。何かうわごとを言っているようだ。その言葉を遮るように、長髪の美少女　関羽と名乗ったが話を続ける。

「ですから、あなたは天の御遣いなのです」

「いや、そんなこと言っちゃって」

「あなたは予言者の管輅の言うとおりに、この地に現れました。そして、管輅の予言は外れたことがございません」

「いや、でも、そんな……」

混乱する一刃に対して、関羽はため息をついた。

「とりあえず、ここから移動しませんか。もう、日が暮れます。それに、この辺りには黄巾賊の連中がうろついています」

「黄巾賊？」

「はい。弱きを襲い、漢を脅かす不逞の輩。……いわば、世の害虫です。先程、あなた様を襲おうとした連中です」

「害虫……」

一刃は、倒れている野盗たちを改めて見た。落ち着いて見れば、

黄色いはちまきをしているだけのただの農民にも見える。だが、その手には粗末であるとは言え、槍が握られているのも事実だった。

桃色の髪少女が言う。

「それじゃ、小沛に戻ろっか！」

「お待ち下さい」

「ん？何？愛紗ちゃん」

「小沛は、予言がなされた場所です。当然、多くの人たちが天の御遣いに関心を抱いています。そうした場所に、いきなりお連れするのはどうかと思います。きっと、混乱を招くでしょう」

一刀に対して膝をついた姿勢のまま、愛紗は長姉にそう告げた。しかし、伝えていない部分もある。

管輅の予言は、いまや国中を駆け巡っている。それで、この世の中に対する憂いは強いのだ。その予言に現れた『天の御遣い』に対する中華の人々の関心　希望は計り知れない。

小沛につれていけば、天の御遣いを欲する人々に、きっと彼は取られてしまうだろう　あの、私利私欲にまみれた連中に。彼らは天の御遣いを担ぎ、それを御旗としてこれまで以上に権力争いに没頭するに違いない。官もまた、腐っているのだ。

天の御遣いをそうした連中に渡してしまうのは、まさに宝の持ち腐れ。いや、害にしかならない。天の御遣いは、真にこの国を憂い、正そうと思っている人々　そう、私たちにこそふさわしい。今は、あまりにも力がない私たち。そんな私たちが義勇兵を集めるには、そして世に認めてもらうためには……。

汚れ役は　私が引き受ける。中華の平和のために、人々の笑顔を
を取り戻すために、そして桃香の理想を叶えるために、私は天の御
遣いを利用する。後ろ指を指される覚悟はできている。そして……

『あの人』の希望を汚した黄巾賊を

見棄てた官吏どもを

私は決して許さない。

愛紗は、血に濡れた青龍偃月刀を手に立ち上がった。

「……下？に、向かいますよう。あそこなら、知人がいます。住む
場所にも当てがあります」

「じゃ、そうしよっか！」

「わかったのだー！」

三人が歩き出した。慌てて、一刀もついていく。ふと、倒れてい
る野盗たち　黄巾賊たちを振り返った。もう、彼らは動かない。
だが、かすかに微笑んでいるように見えた。

死んでしまったんだ……。

それまでは、自分が殺されなかったことに対する安堵だけを感じ
ていた。しかし、その　安らかな死に顔を見て、初めて心が痛ん
だ。自分は確かに「助かった」。けれども、同時にそれは彼らを殺
すことだった。

自分がここに来なければ……彼らは死ななくてすんだんじゃないだろうか……。

それとも、関羽たちが来なければ、やはり自分が死んでいたのか……。

「天の御遣いさまー!？」

劉備の心配そうな声が聞こえる。気がつけば、立ち止まっていたようだ。三人が振り返ってこちらを見ている。

出会ったばかりの自分を待っていてくれる。海のものとも山のものともつかぬ自分を案じてくれている。誰も頼れないこの世界で、今はただ、そのことが単純にうれしかった。

「今、行くよ!」

一刀は地に伏した三人に向けて手を合わせると、劉備たちに向かって走り出した。

夜の帳が降りた。

草原に、季節外れの鈴虫の鳴き声が響き始めた。

若虫なのだろうか。その鳴き声は、ぎこちない。

けれども、いかにも楽しげで　まるで、夢でも見ているかのようだった。

第2章 御遣(1)

「消えた？」

「へえ。今日の昼間までは、確かにそこに座っていたと思うんですが……」

酒屋の店主が答える。

星は、申し訳なさそうに慶次郎を見上げた。

黄巾賊の三人組と別れた後、慶次郎は星に頼んで小沛の街まで案内してもらった。天の御遣いの降臨を予言したという占い師、『管輅』とやらにまず会ってみようと思ったのである。

街への道すがら星から聞いたところでは、管輅はいつも、街の中心にある広場の隅に座っているらしい。

何を聞かれても、何を言われても、黙り込んでいる。黒いボロ布をまとっており、わずかに汚い灰色の髪の毛、もしくは髭のようなものはみ出してみえる。風呂には入らないのか、犬すら近寄らぬ異臭が漂っていたという。恐らくは、老人 星の見立てでは老婆ではないかということだ。

管輅は時折、立ち上がって予言を叫ぶ。そして、その予言は必ず当たるのである。いつしか、管輅の前には小さな祭壇が築かれ、食べ物が供えられるようになった。もっとも、それは腐ることはあれ、減ることはなかったという。

その予言が必ず当たるといふ占い師、管輅。その人物ならば、自分なぜこの世界に呼ばれたのか、その理由を知っているような気がした。しかし。

「これで手がかりは消えたか」

「申しわけござらぬ」

管輅の姿は、広場にはなかった。広場前の酒屋の店主によれば、今日のお昼頃、急にいなくなった。いや、気づいたらいなかったらしい。お昼と言えば、慶次郎が星に会ったちょうどその頃であった。

と、店主がおずおずと声を掛けてきた。

「あ、あの」

「何じゃ？」

「もしや、あなたさまが管輅の予言にあった天の御遣い様でございますか」

「ああ、この方は……」

「いや。残念ながら違う」

それに答えようとする星を、慶次郎が遮った。慶次郎の目を見て、星は察する。そして不服そうに黙りこんだ。

「予言通り、白い服を着ておられますが……」

「いや、これはわしの国、東方にあるのだが。その国の旅装だな。はるばる旅をしてきてこの街のそばを歩いていたらと、黄巾賊の輩に襲われ身ぐるみ剥がされた。途方にくれていたところ、こ

のお方に助けをいただいたというわけじゃ」

「はあ」

「何でも、天の御遣いとやらと探しに来たとのこと。最初は勘違いされて苦労したわ。難儀なことよ。……だが、せつかくの機会。この街にて、しばらく世話になるうと思つとる。よろしくな」

にかりと慶次郎は笑う。主人は納得がいかない顔をしながらも、曖昧にうなずいた。ふいに、慶次郎がぐるりを振り向く。広場の時間が動き出した。

見られている。

是非、会つて欲しい人たちがいる。そんな星に連れられて、慶次郎は広場からほど近い旅館に来ていた。そこには、星と一緒に旅館に滞在しているという二人の女性がいた。

「あなたが、天の御遣い様ですか」

程々と名乗った女性がふんわりと話しかける。頭に変な置物を乗せた、なんとも眠そうな顔をした少女である。

「よろしければ、その証拠を見せていただけませんか」

こちらは、戯志才と名乗った女性だ。眼鏡をかけた知的な雰囲気的人物で、につこりと微笑んでいる。

「だから稟、先ほど言ったではないか。私は確かに見た。慶次郎殿が、天から白い光とともに降りてきたのを」

彼女たちの話を聞いていたうちに、程？と戯志才の二人は主君を求めて旅を続けていることがわかった。この小沛の街を起点として、いろいろな土地に出かけているらしい。星はいわば、彼らの用心棒である。まだここにいるということは、お眼鏡にかなう主君がいな
いということか。

確か、程？と言えば　まあ、星こと趙雲もここにいます。曹操、袁紹、孫策、そして劉備。彼ら英雄たちは、まだ歴史の表舞台に現れていないのかも知れぬ。それとも、目の前の二人が曹操に仕官しない歴史もあり得るのか　そんな慶次郎の思考は、星の怒鳴り声に遮られた。

「だから、何度言わせるのだ！慶次殿は白い光とともに天から降りてきた！天の御遣いに間違いない！」

「しかし、その証拠はどこにもありません。確かに白い服を着ていますが、その素材ならこの街でもすぐに仕立てることが可能です」

「稟！」

「光っていたといいましたが、昨日は快晴。白い服が反射して、光って見えただけなのでは？」

話は平行線をたどっているようだ。仕方なく、慶次郎は声をあげた。

「あゝ、ちょっと良いかな」

三人が揃ってこちらを見る。慶次郎は軽く頭をかくと、話し始めた。

「まず、わしは天の御遣いではない」

「慶次郎殿！」

「しかし、別の国から来たことは確かだ。その国の名を『日本の本』という、ここからずっと東にある国だ」

「ひのもとですか」

「ここから東、海をへだてて浮かんでいる島国だな」

仮に今、日本に戻っても兼続たちには当然会えぬのだろうな
そんなことを思いながら、慶次郎は東の方向に顔を向けた。

「聞いたことがあります。秦の始皇帝が、不老長寿の薬を探させるために道士を送ったといわれる国ですね。別名『蓬莱』というとか」
「蓬莱といえば天の国の別名。やはり、慶次郎殿は天の御遣いだろう」

そう胸を張る星の顔の前で、慶次郎は右手をひらひらと振ってみせた。

「だが、わしは天から啓示を受けたわけでも何でもなし 髭を剃つておつたら、いつのまにかこの国に来ていただけのことよ。多分、何らかの怪異にあつたのだらう。すまんな、星」

「慶次郎殿……」

星が納得のいかない顔をしている。星とすれば、『自分より強い男』という一点だけでも、慶次郎が天の御遣いである証拠となり得た。だが、当の慶次郎が勝負については触れるなどあらかじめ念を押していた それこそ、友人に会って欲しいという星の願いに対して慶次郎が出した条件だったのである。

それゆえの、星の不服顔であった。それにはかまわず、慶次郎は彼女の友人たちに問う。

「さて、程？殿、戯志才殿。あなた方はこの街に詳しいのですかな」
「旅の起点として長いので、いささか」

「それはありがたい。頼みがある」

「頼み？」

「うむ。職を紹介してくれまいか」

「職、ですか……」

「うむ。日の本から怪異によってここまで運ばれたのはまだしも、
路銀も頼るべき当てもなく、ほとほと困っておった。そんな時、お
二方に会えるとは、まさにこれぞ天の配剤」

「……」

戯志才は、無言で慶次郎を眺めた。そして、ちらりと程？に目を
やった。程？がにっこりと頷く。

「……いいでしょう。職を紹介します」

「おお、助かる」

「いえ　こちらとしても『渡りに舟』」

戯志才は立ち上がると慶次郎に促した。

「ついてきて下さい」

連れて来られたのは、街の外れにある屋敷であった。それほど大
きな建物ではない。しかし、質素ではあるが質の良い調度品が揃っ
ていた。富豪の洒落た別荘といった印象の建物である。

戯志才によれば、今は街を離れている知人の屋敷らしい。自由に

使つて良いと言付かっているが、女三人では不用心なため、使つてを躊躇していた。だが、慶次郎がいれば安全であるう、と。

「どういうことじゃ？」

「つまり、この家の警備係をして下さいということですよ。または、私たちが旅をするときのお留守番ですか」

「そんなに、わしを信用して良いのか？」

「貴重品はいつも身につけています。これまでは書物の倉庫として使つていたので、価値があるのはそれくらいですね　まあ、あなたに読めるとは思いませんが」

戯志才は、慶次郎を値踏みするように言った。

「いや、おなご三人に男一人、それで良いのかということよ」

「ご心配なく。ここにいる星はこの国では並ぶ者のない槍の使い手。失礼だとは思いますが、仮に何かあったとしても、恐らくはあなたでは相手になりますまい」

何か言いたそうな星を尻目に、慶次郎は深く頭を下げた

「かたじけない。恩に着る」

「お礼は無用です。この屋敷にいることは自由ですが、賃金は食事代程度しか出しません。ご了承を」

「稟！」

「また、この屋敷の持ち主が戻つたら、遠慮なく出て行ってもらいます。よろしいですか？」

「承知つかまつつた。異論はない」

そう答えながら、慶次郎は戯志才の本心について思った。

彼女の言い方には、何かひっかかるものがある。また、自分を挑発しているようにも感じた。そもそも、星がいれば警備係はいらないだろう。留守番だって、もっと適役の人物がいるはずだ。

もつとも、自分は天の御遣いではないと早々に判断されたのかもしれない。賢い人間ならば、そうするであろう。屋敷に置いておくのは、友人である星への配慮　せめてもの情けということか。

無理もない。

天の御遣いであることを証明する方法は、すぐには思いつかなかった。また、それと証明するものも、やはり思いつかなかった。白い麻の服が、何の証明になるだろう。

それでも、下手に天の御遣い扱いされるよりはずっと気楽であった。そもそも慶次郎自身、自らを天の御遣いと認めるつもりは、これっぽっちもなかった。

以後、慶次郎は気楽な居候として、屋敷で書物を読みながら時間を過ごした。まずは書物から、この国を知ろうと考えたのである。彼にとつて、漢文の読み書きは当然の教養であった。日の当たる部屋の縁側に大きな敷物を敷いて、ごろりと横になって書物を読む。既に読んだことのある書物も多かったが、竹簡に書かれた真新しい『古典』を読むのは、なかなか新鮮な体験であった。

一緒に住んでいる筈の程？、そして戯志才に会うことはほとんどなかった。そもそも、彼女らはあまり屋敷に戻ってこない。たまに戻ってきてても、慶次郎と顔を合わせずに寝室に戻ってしまうのが常

だった。時折、程？が訪ねてきて日本の話をせがむことはあった。しかし慶次郎がその話に付き合うことはなく、やがて訪ねてこなくなつた。

代わりにといいわけではないが、ほぼ毎日、星が慶次郎に会いに来た。程？たちが旅に出ないときは、基本的に暇らしい。最初は槍を合わせたがつていたが、慶次郎に應じる気がないのを悟り、早々とあきらめた。以後、書物を読む慶次郎の傍らで槍の手入れをしたり、昼寝をしたり、自由気ままに過ごしている。

そして夜になれば、慶次郎の酒の相手などをした。その過程で、慶次郎から親しい者は彼を「慶次」と呼ぶと聞き、すぐさまそう呼ぶようになった。「真名のようにすな」と喜んでゐる。

慶次郎は書物に飽きると街に出て、店を覗いて回つた。やはり異国、知らないもの、珍妙なものがたくさんある。好奇心旺盛な彼はいろいろと質問をしては店主たちを困らせた。もつとも、最初に会つた酒屋の主人とは懇ろになり、いまでは新しい酒について議論するまでになつてゐる。

そのような日々を一カ月程続けたとき、旅装の三人がやってきた。

「慶次殿」

「ん……」

星の声に、読みかけの『孫子』から目を離す。

「どうした」

「我々はこれから徐州の首都、下？に向かいます。一ヶ月程で戻ります」

「ほお。なかなかの長旅だな。気を付けられよ」
「はい……」

星は浮かぬ表情をしている。

「いかがでした」

「実は……」

そんな星の言葉を遮って、程？が話す。

「実はですね。下？に現れたらしいのですよ」
「現れた？」

表情を感じさせない顔で、戯志才が続けた。

「ええ。『本物』の天の御遣いが」

第2章 御遣(2)

星たちが旅立った翌日。慶次郎はいつものように屋敷の縁側に敷物を広げ、その上に寝転がって書物を読んでいた。

ふと、顔を上げて庭を眺めた。なかなか広めの庭で、中央には瀟洒なあずまやがある。塀の向こうには、街の中心街が見えた。まさに中華風といった五階建ての真っ赤な建物が、その存在を誇示している。

時刻は昼。太陽の光が心地良い。

「だいぶ、減ったな」

慶次郎は、屋敷の周りの監視の目が減ったことを実感する。

徐州の地に『天の御遣い』現る。そのことを、慶次郎は戯志才に告げられる前に知っていた。というより、それは既に街中の噂になっていた。

噂によれば、確かに管輅の予言通り、天の御遣いは小沛の街の東に白き光と共に現れた。彼は世を憂う人々の前に姿を現すと、彼らを引き連れて徐州の首都である下？へと向かった。そして、下？は瞬く間に空前の繁栄を迎えた。それも皆、天の御遣いのおかげということになっている。

結果として、街の人々の慶次郎を見る目も変わった。単なる、ちよっと変わった旅人として見るようになったのだ。それは慶次郎にとって、ありがたいことだった。

そして屋敷に来た直後は十を越えていた監視の目は、下？の天の御遣いの登場の噂とともに減り続け、今や二、三程度にまで減っていた。

ばたり。

慶次郎は書物を床に置く。これでほぼ、屋敷にある書物は読み尽くした。残りは、片手で数えるに足りる。

そろそろ、潮時か。

慶次郎は立ち上がり、部屋の隅に歩いて行く。そこには、星が槍の練習用に置いていった櫓の棒がある。慶次郎はそれを無造作に掴むと、天井をその先で突いた。

「きゃん」

女性の悲鳴が上がった。

「おい。降りてこい」

「……」

「降りてこぬなら、こちらにも考えがあるぞ」

「……」

一瞬の間があった。天井の隅の天井板がそろりと横に動く。と、そこから長髪の女性が飛び降りてきた。頭には、鉢金のようなものを巻いている。背負っている身長にも迫ろうとする大刀は、日の本の刀だろうか。

「おぬし、名前は」

「……」

「まあ、明かせぬよな。すまんの」

軽く頭を下げる慶次郎に、少女はびくつく。

完全に油断していた。この一ヶ月、目の前の男はひたすら書物を読み、寝転んでいた。ただ、それしかしていない。自分の監視に気づいている素振りなど、まったくなかった。

そしてこの男、見ているだけで眠くなってくるのである。とにかく、心が穏やかになってくる。この時間、慶次郎が書物を読むその天井で居眠りをするのが、ここ最近の周泰。明命の習慣になっていた。それが、気がつけばこんな事態になっている。

「今日は、良い天気だ」

「……はい？」

いきなり、妙なことを言い出した男に、明命はつい言葉を発してしまった。

「せつかくの機会だ。おぬしの主に挨拶に来いと伝えよ。そして、言いたいことがある言えば言え、とな」

明命は息を止めた。それは。

「なに。主と相談して決めれば良い。来たくなければ、それはそれでかまわぬ」

「はあ……」

「それにしても」

慶次郎は、状況がつかめない明命の姿をまじまじと見る。

「な、何ですか」

「……おぬし、傾いているのう」

「へっ？」

本当に、何が何だか明命にはわからなかった。

夕刻。二人の主従が早足で慶次郎の屋敷に向かっていた。

「なんで、ばれたのよ」

「やむを得ない事情で……申しわけございません」

「それにしても、あなたが見つかってしまっなんてね。そんなに、その『前田』って男はすごいのか？」

「うっう……とにかく申しわけございません」

涙目になりながら、明命は孫策　雪蓮についていく。

雪蓮は思う。ああ、面倒くさい。面倒くさがって時間を潰していたら、気がつけば夕方になっていた。

こんなことになるなら、本命の下？は冥琳にまかせず、自分が行くべきだった。もはや天の御遣いとは思えない存在のために、無駄な時間を使いたくない。

孫家に天の御遣いの血を入れるためには、一刻も早く『本物』を抑える必要があるのだ。実際、明日は冥琳の帰りを待ってあらため

て下？に向かう予定であった。

「そもそも、私や冥琳が徐州まで来ることないでしょうに」

「そう、おっしゃらないで下さい。天の御遣いの見極めは、恐れ多くて私たち程度では無理だとか存じでしょう？」

「だけどさー」

ぶつぶつ言いながら、雪蓮は慶次郎の屋敷に飛び込んだ。

「入るわよー」

雪蓮は声をかけると、返事もまたずかずかと部屋に入り込んだ。適当に話して、すぐに帰るつもりだった。

「ねえ……」

と、雪蓮は息を止めた。

大きな男が一人、こちらに背を向けて座り、酒を飲んでいた。その隣には、大きな酒瓶がある。夕日の影になった背中は、さながら黒い壁のようだった。その姿はまるで 雪蓮は目を大きく見開いた。

「お父様……」

男が振り向いた。

「雪蓮様？」

明命の声に、振り返らずに雪蓮は答えた。

「帰りなさい」

「え、でも……」

「帰りなさい。これは、命令よ」

一瞬の躊躇の後、明命は雪蓮の背中に頭を下げた。出て行った。

静寂。

と、雪蓮はふらふらと歩き出す。そして慶次郎の側まで歩いてくると、ぺたりと座った。そんな雪蓮に、慶次郎は無言で酒杯を回す。そんな風に、時間が始まった。

気がつけば、雪蓮は慶次郎によりかかり、酒をついでいた。二人の間に、これまで会話は何も無い。酒瓶が半分空になった頃、ようやく、雪蓮が言葉を発した。

「あなた、天の……まあ、いいか」

「どうした？」

「名前、なんて言うの」

「人の名前を聞く前に、己の名前を言ったらどうかの」

「……まだ、言ってなかったかしら。私は孫策。字は伯符よ」

「……わしは前田慶次郎」

「ふーん」

雪蓮は慶次郎の背中に、そつと腕を回す。

「あなた、私のお父様に似ているわ」

「そうかね」

「といつても私、顔は覚えてないの。……覚えているのは背中だけ」

「……」

「こんな、背中だった」

雪蓮は、慶次郎の背中を優しく撫でる。

「ここには、独りで住んでるの？」

「今はな」

「今は？」

「ああ。普段はわし以外に、おなごが三人いる」

ぎゅうと雪蓮の右手が、慶次郎の背中を掴んだ。

「……どうした、孫策」

表情を変えずに、慶次郎が静かに尋ねる。

「何でもないわ。……惚れてるの？」

「誰にだ？」

「とぼけないですよ。その三人」

「……いや。だが、恩がある」

「……そう」

再び、慶次郎の背中を雪蓮は撫で始める。そして、聞いた。

「惚れてる女はいるの」

「ああ」

「……」

雪蓮の手が止まる。

「……というより、『いた』というのが正しいか」
「いた？」
「もう、この世にはおらん」
「そう……」

雪蓮はまた、慶次郎の背中を撫で始めた。そして、また聞いた。

「ねえ、どんな人だった」
「ん？」
「その、女性よ」
「ふむ。わしには、うまく例える言葉はみつからん。ただ、わしの友は……」

カルロスの顔を慶次郎は思い出していた。

「『世界を得るに等しい女だ』と言っていたな。わしも、そう思う」
「！」

雪蓮の手が止まった。そして、また聞いた。

「ねえ、『雪蓮』と呼んで」
「しえれん？」
「私の真名」
「……受け取る理由がない」
「……これから、作ればいいじゃない」

雪蓮は表情を変えずに言葉を続ける。爪が背中にめりこみ始めた。

「……憎い男」

「……憎まれるほど、おぬしを知らん」

「……これから、知ればいいじゃない」

慶次郎の背中から、血がにじみ出した。

第2話 御遣(3)

「私は周瑜と申す者。こちらに我らが主君、孫策様がご滞在と聞き、参上いたしました」

雪蓮が訪れた翌日の朝。入口の鐘が鳴る音を聞いて応対に出た慶次郎は、二人の女性と向かい合っていた。眼鏡を掛けた褐色の肌の女性と、昨日天井から飛び降りてきた黒い長髪の少女である。

「確かに、ここにいるぞ。……おい、雪蓮！」

冥琳はその流麗な眉をひそめた。真名を許しているだと。

あのばかめ……。

ほどなくして、奥の部屋からしどけない格好の雪蓮が出てきた。

「どつしたの？冥琳」

「……」

冥琳はため息をついた。

「こんなところにいたのか。探したぞ」

冥琳は語気を強めた。

雪蓮、冥琳、そして明命の三人は庭のあずまやにいた。彼女らが

囲む丸い卓の上には、三つの茶碗が載ったお盆がある。先程、慶次郎が置いていった。意外においしいので、冥琳は驚いた。

庭に向かう部屋の縁側近くの床に、寝転がって書物を読みふける慶次郎の姿が見える。そんな男を見ながら、雪蓮は冥琳に問うた。

「結論は？」

「ああ。『本物』だ。下？の天の御遣いとやらは」

「……ふーん」

気乗りのしない声で雪蓮は答えた。冥琳は話を続ける。

「かの者が下？に到着するやいなや、諸葛亮と鳳統が現れて主従を申し出た」

「あの、伏龍と鳳雛が？」

「ああ。それだけではないぞ。他にも魏延、黄忠、嚴顔……いずれも知るものぞ知る、猛将たちが主従を申し出ている」

冥琳はお茶をすすする。

「彼が下？に来て二週間後、黄巾賊八千が来襲。州牧の陶謙は心労で倒れてしまった」

「それで？」

「下？の兵士はそのときわずか二千。しかし、倒れた陶謙の前に『たまたま』いた天の御遣いの指揮のもと、徐州軍は黄巾賊を奇襲によつて見事撃退。……まあ、これは軍師の指揮によるものだろうが」

「ふーん」

「そこで名を挙げたのが、その黄巾賊を指揮していた波才を見事討ち取った関羽。そして、それに負けじと武威を示した張飛だ」

さらに、と冥琳は続ける。

「彼女らの長姉である劉備は、その類いまれな魅力で下？の『偶像』（アイドル）となつてゐる。いや、彼女だけではない。関羽、張飛、諸葛亮、鳳統……皆、街では大人気だ。彼女らの似顔絵が、市の至るところで売られてゐる。」

それにともない、黄巾賊を恐れていた商人どもが、どつと集まつた。黄巾賊を討つための義勇兵もぞくぞくと集まつてゐる。その兵力は、少なく見積もつても既に三万。……そして御遣いが来て三週間後、陶謙は息を引き取つた。徐州を御遣いに託してな」

そこまで言うと、冥琳はもう一度お茶をすすつた。

「……結論として、天の御遣いは下？に来てわずか三週間で徐州を得たことになる。誰にも恨まれず、誰からも称賛されるかたちでだ。そして今、徐州の首都である下？は空前の繁栄を迎えつつある。」

すべてが、御遣いの力によるものとは思えない。けれども、御遣いがいるからこそその繁栄であることは確かだ。……正直、私は恐ろしい。天が味方しているしか思えない。御遣いは、まさしく『天運』の持ち主と言つべきだろう」

「天運……」

「だが、これで我らの側に引き込むことは難しくなつた。もはや、やつは徐州の英雄だ。我々が御遣いの『種』を得たいと申し出ても、容易に引き受けることはなからう。……特に、やつ回りの連中はな」

「そう……」

「管輅の予言に頼りすぎたな。いくらその予言が外れたことがないとはいへ、小沛に気を取られすぎた。明命もこちらに配置してゐたし。とにかく、仕切り直した。何とか、天の御遣いとつながりを作らなくては」

「そうねー」

気のない返事を返し続ける雪蓮に、流石に冥琳は声を荒げた、

「おい、雪蓮！」

「何よ」

「空返事はよせ。真面目に聞いているのか？」

「聞いてるわよ」

「お前が思いついた、天の御遣いの血を入れて……計画。ほぼ、潰えたのだぞ」

「考えてみると、お馬鹿な計画よねー」

「……お前がそれを言うか」

冥琳はがっくりと肩を落とすと、ため息をついた。そして、雪蓮の視線の先を追う。

「……そんなに、いい男か」

「そんなに、いい男よ」

「……」

雪蓮は慶次郎の姿を見つめ続ける。冥琳がその横顔を睨み続ける。張りつめた時間が過ぎていく。

何も発言できない。明命は、今にも胃袋が破れそうだった。

「……まさか、後を蓮華様に譲るとでも言うのではあるまいな。冗談でも許さんぞ」

「蓮華に後を譲る……」

雪蓮は冥琳の言葉を繰り返す。そして頷いた。

「譲つてもいいわ。それで、あの人が振り向いてくれるなら」
「雪蓮！」

「でも、だめね。……せめて、『王』にはならないと」
「雪蓮？」

「呉に帰るわ。……早く、王にならなくては」
「しえ……」

冥琳は言葉を止めた。

昨晚、慶次郎は雪蓮を抱かなかった。酔いつぶれた雪蓮を奥の寝室に運ぶと、戻って独り、酒を飲み続けた。らしい。起きたとき、当然あるべきと考えていたその温もりは隣になかった。その時に感じた寂しさ、そして……。

雪蓮の瞳には、狂気にも似た光が宿っていた。

「あの人を、振り向かせるわ」

「慶次、世話になったわね」

「なに。旨い酒が飲めた」

「こちらこそ」

「そういえば、雪蓮」

「なあに？」

「おぬし、何をしに来たのだ？」

「忘れちゃった」

雪蓮はちろりと舌を出すと、くるりと背を向けて足早に屋敷を出

て行った。冥琳と明命は慶次郎に一礼すると、慌てて雪蓮の後を追いかける。彼女の足は、速い。

一刻も早く、呉に帰ろう。

そして 袁術を潰す。

そうしたら……。

彼らが街の中央部に至ったとき、雪蓮がぐるりと振り向いた。猫のような笑顔 既に、先ほど冥琳に見せた一瞬の狂気は消えている。そんな彼女を、冥琳はじろりと睨んだ。

「何よ、冥琳。怒ってるの？」

「当たり前だ。……さっき、自分が言ったことを忘れたのか？」
「私が言ったこと……？」

雪蓮は右手の人差し指を顎に当てて、首を傾げた。

「ああ、蓮華に後を譲るって言ったこと？」

「そうだ。たかが男のこと、そのような大それたことを……ただの男じゃないわ。天の御遣いよ」

「ふん。天の御遣いが二人もいてたまるか。それに」
「それに？」

こちらの方が、より重要なのだろう。冥琳は息を整えると、静かな目で雪蓮を見つめた。

「好いた男を振り向かせるために、王になると言ったな」

「そんなこと、言ったかしら」

「しらばっくれるな。そんなこと、私はともかく」

そう言うと、冥琳は一瞬、明命に視線を移した。明命はびく、と身体を震わせる。

「……他の連中に聞かれてみる。許されん」

「わかってるわよ」

雪蓮は両手を腰に当てると、静かに言った。

「……私が王となるのは、お母様の無念を晴らすため。そして、孫家を奉じ、命をかけてくれる者たちの居場所をつくるためよ」

「わかっていれば、それでいい」

「だけど」

「だけど？」

「理由は幾つあっても、いいわよね？」

「雪蓮……」

ぐきゅるるる。

緊張を引き裂く緩慢な音が響いた。雪蓮と冥琳が同時に振り向く。その音源は、明命のお腹辺りであった。

「も、申しわけありません！」

「……いいのよ。そういえば、もうお昼ね。どこかで食事でもしましようか」

「あ、それでしたら」

明命がうれしそうに答える。そして、ある建物を指さした。

「あそこはいかがですか」

そこには、五階建ての真っ赤な建物があった。店先から、絶え間なく人々の笑い声が聞こえてくる。なかなか繁盛しているようだ。

「『流流楼』という、この街一番の高級料理店です」

「流流楼……」

「何でも、一年前にできたばかりということ。ここ小沛でも、人気のお店です。私も一度食べたいと……」

「……ほかの店にしましょう」

「しえ、雪蓮さまあゝ」

肩を落とす明命を尻目に、雪蓮は再び歩き出した。

妙に、気に入らなかった。

第2章 御遣(4)

北郷一刀は、徐州の首都である下?にいた。

現在、徐州牧は桃香である。中山靖王の血を引く桃香が、対外的にはもつとも州牧に相応しい。そう主張する軍師、諸葛亮こと朱里の発案によるものであった。朝廷への報告も既に済んでいる。けれども、その桃香が『ご主人様』と呼ぶ一刀が事実上の徐州の主であることは、下?の街に住む者であれば誰でも知っていた。

一刀は、未だその立場に慣れないでいる。現代日本の一高校生が、たった一ヶ月でこの立場に慣れたらその方がおかしい。そもそも、想像することすら難しい三国志の、しかも主要人物が美少女の別世界だ。

しかし、その立場に慣れようと一刀は必死だった。それは、自分を『天の御遣い』と信じる少女たちの期待に応えたいと思うが故である。少女たちの期待。それは『中華の統一』および『平和な世の中』の実現である。

そのように期待されたとき、一刀は本気で逃げだそうと思った。ただの高校生が、三国志の英雄たちの中で何ができるといえるのだろうか。しかし、彼女らの真摯な気持ちに触れるたびに、自らの浅はかさを恥じるようになった。

自分と同一年に見えるような少女たちが、命をかけて世を正そうとしている。そんな彼女らに頼られた。その期待に応えることができずに、日本男児といえるものか。

そんな一刀の態度は、当然のことであるが少女たちの更なる思慕を生んだ。その思慕がやがて恋慕に変わるのは、ある意味自然の成り行きであった。

天の御遣いでありながら、それを鼻に掛けない謙虚な態度。天の国の知識を惜しみなく提供するその知性。流石はご主人様、自分たちの選択は間違いではなかった。彼女らは自らの目の正しさを誇った。

至福の日々であった。ただ女性に、とりわけ妙齡の女性にもて過ぎるのは困ったものだと思っている。

「さて、そろそろかな」

「はい。すでに扉の前でお待ちになっているはずですよ」

紫苑の返事を聞いて、一刀は改めて竹簡に目を落とした。そこには、これから会う三人の名前が記されていた。胸が躍る。

ようやく、会えるんだ。

目下、一刀は紫苑、桔梗と一緒に人材の選抜を担当している。現在、下?には将軍として愛紗、鈴々、紫苑、紫苑、そして焰耶がいる。しかし、内政を任せる人材がまだ少ない。将軍となる人材もまた、日々増加する兵士たちのことを考えれば、余裕がある今のうちに選抜しておく必要があるように思われた。

才能ある人材を見極める『天眼』、そしてその人材に惚れ込まれる『魅力』。前者は、単なる知識でしかないのだが、の持ち主

とされる天の御遣いにとって、人材の選抜はまさに『天職』であった。

手元にある竹簡の最初に記されているのは程？、字は仲徳という人物である。魏の曹操に仕えたと記憶している。確か、漫画では顔の細長いおじさんだったような。そして二人目は戯志才　この名前には見覚えがない。そして、三人目は趙雲、字は子龍。

ちなみに一刀の三国志知識の元ネタは、コンビニエンスストアで時々立ち読みしていた『週刊モーニング』の連載漫画、『蒼天航路』だったりする。それだけに、自分を助けてくれた三人組がああ劉備、関羽、そして張飛であると知ったとき、その落差の大きさに驚愕した。なんて世界だ。

そして『蒼天航路』において一刀が最も好きなシーン　それは長坂坡で趙雲が活躍する場面である。以来、趙雲は彼が一番好きな三国志の武将であった。その趙雲が、今あの扉の向こうにいる。

この世界の理として、恐らくは趙雲も美少女、もしくは美女であろう。もし彼女が下？に来てくれたら、この段階で五虎将のうち実に四人が揃うことになる。

仕官してくれないかな　いや、これまでの流れならば、あるいは。

彼自身、自らのもとに集う女性たちが『蜀』に関わる人材であることに、既に気づいていた。

一刀は深呼吸して息を整えると、部屋の入口に控える文官に手を振った。

「お兄さんのつくったお菓子は、本当に美味しいですね。」

「ありがとうございます、風。おかわりはたくさんあるから、どんどん食べてくれ。」

「ありがとうございます。」

彼女は今、すでに三皿目になるホットケーキもどきを食べている。その上には、蜂蜜がたっぷり掛けられている。カロリーという概念を知らない、この世界の住人に感謝だ。

面接するはずであった場合は、いつの間にか軽食パーティーと化していた。乱入してきた鈴々が、一刀におやつをねだったためである。程？と戯志才は、それを快く許した。程？にいたっては、既に真名すら一刀に預けている。ちなみに、鈴々はあつという間に五皿程食べ終わると外に飛び出していった。

「北郷様。あなたの知識には驚かされるばかりです。とくに、先程おっしゃった警備体制は画期的ですね。」

「ありがとうございます。でも、これはオレの世界では当たり前のこと、別にオレが考え出したわけじゃないんだ。」

「そのような謙虚な姿勢も、流石は天の御遣いと言うべきでしょう。」

「そ、そうかな……ありがとうございます。」

微笑み合う一刀と戯志才　　そうした姿を見て、紫苑と桔梗もまた、微笑み合った。

さすがは、ご主人様。人の心を蕩かす、天与の魅力を持っているっしやる。しかし……。

紫苑は、自分の正面に座っている女性に目を向けた。名を趙雲、字を子龍と名乗ったその女性は、ほとんど口を開いていない。それだけではない。最初こそ一刀のことをじっと見ていたものの、途中で目を離すと、それから一度も一刀を見ようとしなかった。天の御遣いを目の前にした者の態度としては、いささか異常に見えた。

「あの、趙雲殿。お口に合いませんでしたか」

紫苑が笑顔で尋ねる。このようなとき、潤滑油となるのが自分の役割だと認識している。天の御遣いを目の前にして、緊張して話せなくなる女性も多いのだ。

「いえ。大変、結構なお味かと存じます。しかしながら、体調が優れぬもので」

趙雲こと、星は静かに答える。緊張している様子は、ない。むしろ、堂々としている。それならば、なぜ 紫苑には不思議に思っただ。

「あのさ、趙雲さん」

初めて、一刀が星に話しかけた。ぴく、と星の肩が揺れる。一刀は、これまで何度も声を掛けようとその機会を狙っていた。しかし、星となかなか視線が合わない。そこで、あえて話しかけたのである。

「……何でしょうか」

「この下？のこと、どう思う」

「はい。……とても素晴らしい街だと思います。民の顔には笑顔があふれ、将は理想に燃えている。私はこれまで大陸中の街を旅して

参りましたが、これほど活気のある街はなかなかないと」

下？のことをほめてくれた　一刀はうれしくなった。しかし、同時に不安にもなった。なぜ、彼女は笑ってくれない。

「あのさ……」

「失礼」

星がいきなり立ち上がった。皆の視線が星を向く。

「体調を崩しております。まことに申しわけございませんが、お先に失礼してよろしいか」

「趙雲！」

つい、一刀は大声を出してしまう。星は、そんな一刀のことをじろりとらんだ。

「怒鳴ってごめん　でも、聞いて欲しいんだ。」

「……」

「今、徐州はこの首都、下？を中心に繁栄を迎えつつある。ここに
いる紫苑、桔梗、そしてここにはいないけど桃香、愛紗、鈴々、朱
里、雛里　たくさんの仲間たちの頑張りでこうなったんだ」

「存じ上げております」

「……趙雲さん、君も仲間になつてくれないか。君の力が、必要だ。
きつと、君にとっても居心地のいい場所になると思う」

そういうと、一刀は頭を下げた。紫苑と桔梗は言葉を失った。こ
のような無礼な輩に対して、このような態度をお取りになるとは…
…。それに対して、星は下を向くばかりだ。

「おぬし。お館様はこのように申しておる」

「……」

「信義には信義で返す。それがもののふの心意気と思うが」

「……」

「桔梗」

「何だ、紫苑」

「趙雲殿」

「……」

「急にごめんね。ご主人様も一生懸命でつい、大きな声を出しちゃったの。許してくれるかしら」

「……失礼する」

星は下を向いたまま振り返ると、そのまま早足で部屋を出て行った。

「ふー。嫌われちゃったかなあ……」

一刀はしよげた。一番、話したい相手だった。そして彼女が来てくれれば、中華の統一、そして平和な世の中の達成により近づけるだろう。なのに……。

「あの娘、泣いていましたわ」

「泣いていた？」

「ほら、その床」

紫苑は指をさす。一刀は、先程まで星が立っていた場所を見た。床には、小さな染みができている。

「あの〜、すみません」

「風？」

「星ちゃんは、お兄さんを嫌いなわけじゃないんです。下？のことも、ほめていたじゃないですか」

「……でも、一度も笑ってくれなかった」

「星ちゃんは、悔しかったんだと思います」

「悔しかった？」

一刀は首をかしげた。訳が分からない。

「ここ、徐州の首都である下？で、お兄さんは天の御遣いとしての責務を果たし、皆に愛され、そして何より認められています」

「……そ、そうかな？」

「ですが、もしお兄さんが認めてもらえなかったら？ 天の御遣

いであることは確か。敬すべき人物であることも確か。にもかかわらず、そのことを誰も認めてくれなかったら。そして、認めさせる方法もなかったら。……主従を誓った臣下としていかがですか、黄忠殿。 蔽顔殿」

「……」

「悔しくは、ありませんか。泣きたくは、ありませんか」

紫苑と桔梗は顔を見合わせた。この娘は、何を言おうとしている。

風は稟に一瞬目を走らせると、一刀の顔を見た さあ、今日の『目的』を果たそう。

「小沛にも、いらっしやるんですよ」

「誰が？」

「……『天の御遣い』が」

「……え……」

一刀、紫苑、そして桔梗の声が重なった。

第2章 御遣(5)

「はあ……」

下?の街、西側の城壁の上に座り、星は深いため息をついた。まさか、泣くとは思わなかった。……この自分が。

あのような場所で、こともあろうに涙をこぼしてしまうとは武人として、あらゆる失態である。星は唇を噛んだ。

気がつけば、慶次郎の存在は星にとって大きなものになっていた。

最初は、好奇心だった。白い光とともに舞い降りた『天の御遣い』。そして『女より強い男』という矛盾の体現者。その不可思議さに心惹かれ、共に過ごす気になった。その行く末を見たい、そんな気持ちになった。だからこそ、主従を申し出た。

小沛で過ごした一ヶ月は、慶次郎に対する気持ちを育てるには十分すぎる時間であった。強く、賢く、剽けていて、そして 優しい。いつしか、彼の所作を目で追う自分に気づいた。だが、それが恋慕であるとは気づかずにはいた。こんな経験、今までなかったのだ。

しかし、自分の目から熱いものがこぼれたとき、ようやくわかった。自分は慶次郎に惚れている。同じ武人としてだけではなく、一人の男性として。

星はつぶやいた。

「困った」

これまで、他人の恋愛ごとに首を突っ込んでばかり回すことを喜びとしてきた。そんな自分が、いつのまにかその恋愛ごとの渦中にいる。

「困った」

もはや、他人の恋愛ごとを笑えない。人を呪わば穴二つ。いや、他人の恋愛を気にする余裕もない。まずは、自分の気持ちをどうにかしなくては。

「困ったなあ」

星は城壁の上で立ち上がった。そして西の方角を見た。そちらには、小沛の街が 慶次郎がいる筈だ。

「……覚悟してもらいますぞ、慶次殿」

先程までの憂い顔が嘘のように、星は微笑んだ。

「そんなことがあるものか！」

愛紗の声が部屋中に響いた。ここは会議の間。桃香の座る美しい椅子を上座として、その左右に徐州の主な武将たちが揃っている。一刀は、桃香の左に立っていた。

ここにいる武将たちは皆、一刀が『天の御遣い』であることから

縁が生じたと言える。したがって、誰が天の御遣いであるかということ、彼女らにとって非常に重要な問題であった。

「愛紗ちゃん、少し落ち着いて。まずは程？殿と戯志才殿の話聞きましよう」

紫苑が愛紗をなだめる。愛紗は下座を睨むように見た。そこには、風と稟が並んで平伏している。

「その者たち」

「はい」

「小沛の街に、もう一人の天の御遣いがいらっしやるとい話。本当か」

「それについては、私がお話いたします」

稟は顔を上げた。

「その天の御遣いは、ちょうど北郷様がこの世に顕現された日、やはり小沛の東に顕現されました。そのことは我が友、趙雲が証言しております。我が友は冗談を好みますが、このようなことで虚言は弄りませぬ。その証言をお疑いならば、私と程？、いずれもお疑いになりますように。そして」

その者は『前田慶次郎』と名乗っております。

一刀は凍りついた。

前田慶次郎……？

震える声で、聞く。

「あの、どんな……どんな感じの人なのかな」

横から、風が口を出す。

「一日中寝転がって書物を読んでいます。日本の出身だと言っていました。風のことをなかなか構ってくれません。いけずな男です。身の丈は六尺五寸（一九七cm）はあるでしょうか」

稟が続ける。

「失礼ですが、北郷様は会話には問題がなくとも、読み書きにつきましてはこれからの由。しかしながら、前田様におかれましてはわが国の教養を既に十分お持ちであり、私たちとて感心させられる程でございます。現在は、小沛の街にある私たちの屋敷にご滞在いただいております」

「刀は思う。似ている。あの『花の慶次』に……。」

「馬……そう、馬が一緒じゃなかったかな。大きな黒い馬なんだけど」

「残念ながら……。星によれば、白い服を着て一人、荒野に顕現された」と

「どうなのだ。確かめたい。もし、その人が『あの人』ならば……。」

「黙り込んだ一刀を心配したのだろう。桃香は、左脇に立つご主人様を見上げて言った。」

「大丈夫！たとえ、その人がもう一人の天の御遣い様だったとして

も、私たちのご主人様への気持ちは変わらないよ!」

そんな桃香を見て、鈴々と焰耶も言葉を続ける。

「そうなのだ! 鈴々のお兄ちゃんは、お兄ちゃんしかいないのだ!」

「元から私の忠誠は桃香様のものだ。北郷、お前が本物だろうが偽物だろうが私には関係ない」

「焰耶! 口を慎め」

愛紗は焰耶を叱咤すると、必死の面持ちで一刀に迫った。

「ご主人様! そのような者、気になさる必要はございません。無視すればよろしいではありませんか 第一、こちらの世界に来て一ヶ月、何もせずただだのんびりと寝転んで過ごしていただけの男に、天の御遣いを名乗る権利などございません!」

この一ヶ月、愛紗は下? の支持者の力を借りて、全力で天の御遣いたる一刀の喧伝に努めてきた。そのかいあって、一刀は『天の御遣い』として人々に認められ、晴れて桃香は徐州の主となることのできたのである。それを今さら……。

普段の彼ならば、愛紗の迫力に腰を引いてしまったことだろう。

しかしながら、そこにいたのはいつもの一刀ではなかった。

「会いに行く」

「ご主人様!」

「会いに行くよ」

「……」

「その人が、もし、オレの予想通りなら」

愛紗は目を見開いた。ご主人様の目が濡れている。

「その人は、オレの憧れだ……そして」

一刀は諸将をぐるりと見渡し、宣言した。

「きっと、天の御遣いだ。オレにはわかる。それ以外にないよ」

その毅然たる態度に諸将は息を呑んだ。はっ、と頭を下げる。

「風、戯志才。慶次さん……いや、前田慶次郎殿のところに案内してくれ。頼む」

「承知いたしました」

二人は平伏した。そして下を向いたまま、視線を交換する。

そんな二人を、憤懣やるかたない顔をした愛紗が睨んでいた。

「おい、あんなこと言ってるぞ」

会議室を壁一つ隔てた部屋で、二人の男が並んで立っていた。一人は文官の服を着た、栗色の髪 of 若い男。もう一人は、ふんどしを締めた褐色の筋肉たるまである。

「貂蝉、どう思う？」

「そりゃ、憧れの人が近くにいると知ったら、誰だって一目会いたいと思うでしょうね」

「憧れの人か……目の前に、三国志の英雄たちが綺麗に着飾って揃

っているっていうのに。贅沢な男だ」

そういいながら、若い男の顔はまんざらでもない。

「左慈」

貂蝉と呼ばれた巨躯の男が話しかけた。

「そういえばあなた、ちよつと頑張りすぎじゃない？……蜀の面子が揃うの、ちよつと早過ぎやしないかしら」

「いいじゃねえか。ここは『北郷一刀が中華を統一する世界』。北郷が楽できるなら、それに越したことはないだろう？」

「……」

「趙雲が仕官しないのは意外だったが……好きにさせてもらうぜ。こんな機会　オレが北郷を応援できる機会なんて、滅多にないんだ」

そういうと、左慈は頭の後ろに手を組んで天井を見た。その表情は伺うことができない。

「……左慈？」

「あ、そうそう」

貂蝉の問いかけに、左慈が話題を変える。

「そろそろ、管輅の奴を起こしに行かなきゃならなかったな……また『鏡池』か？」

「『仕事』は終わったんでしょ。しばらく放っておいてあげなさいよ」

「于吉からの連絡があった……追加でもう一つ仕事があるそうだ」

左慈は頭の後ろに組んだ手をとくと、右手でその頭をかいた。

「何でも、大事な仕事らしいぞ」

第3章 冬華(1)

小沛の街から、西へ五里(約二〇km)ほど。『臥牛山』といわれる山があつた。名前の通り、牛が伏せているようなかたちの山である。山壁は急で、断崖絶壁となっている。一つだけ、ふもとから頂上まで上れる道がある。

その頂上には、池があつた。名を『鏡池』という。冷たく澄んだ湧き水で知られている。また、病気が治る霊水としても知られ、小沛の街からも時折その水を汲みに来る者がいた。しかし、最近ではとある理由により、水を汲みに来る者は、ぱったりと途絶えている。

その池のほとりに薄汚れた黒衣をまとい、風に吹かれてよろよるとたたらを踏む小柄な人影があつた。管輅である。

管輅は、疲れ切っていた。その『管理者』という役割に　その魂の牢獄に。これまで、何度『天の御遣い』の顕現を予言してきただろう。百回か、千回か、それとも万回か。もはや、数えてすらない。

『北郷一刀が中華を統一する』この世界で、管輅や貂蝉は、于吉や左慈と敵対関係にある、ことになっている。だが、それは建前であった。実際には、仕事仲間といって良いだろう。彼らは、いわば天から与えられた管理者という配役をこなす俳優であつた。

一刀たちもまた、繰り返されるこの外史で配役を担う俳優に過ぎない。だが、管輅たちと一つだけ違いがあつた。一刀たちには先に

過ごした外史の記憶がなかった。俳優としての自覚がなかったのである。だからこそ、彼らは繰り返される『たった一度』の人生を精一杯生き、戦い、そして散っていった。

彼らがうらやましかつた。その人生をたった一度と信じて、全身全霊を燃やす彼らは輝いて見えた。わたしも、あんな風に生きてみたい。管輅は心から願った。戦乱の中で『生』を実感したい。好きな男に『恋』を叫びたい。慟哭の中で『愛』を抱きしめたい。

だが、それは叶わぬ夢だった。その夢はいつしか、管輅の心を削っていった。あり得ない夢は、絶望に似る。やがて、身なりにかまわなくなった。身ぎれいにするのも止めた。『徐州の水仙』とうたわれたその美貌は、いまや垢にまみれて老婆の如く乾いている。

そんな管輅の最近のお気に入り、鏡池で入水することである。衰弱した状態で入水すると、絶食して体力を失った体はあつという間に抵抗を止める。すると、眠るように『死ぬ』ことができるのだ。実際には、それすら『仮の死』に過ぎない。管理者に、死ぬことは許されない。それでも、水の底で過ごすその時間は、次の外史までの束の間の安らぎであった。

そのために、管輅は『予言』をした。『百発百中』の予言である。その結果、ここ最近の外史においてその予言はまさに『天のお告げ』に等しいものとなっていた。実際、小沛の街で彼女は半ば神格化されている。

本来、管輅の役割は、自称『占い師』である。したがって、その予言は『当たるも八卦、当たらずも八卦』程度のものであることが

求められた。しかし、そのように演技するつもりは既になかった。どうせ、結果は同じなのだ。ならば、さっさと予言という名の『予定』を発表する『仕事』をこなした方が良い。

今回もそうだった。いつも通りの予言　天の御遣いの顕現を伝える仕事を終えて、管輅は鏡池のほとりに立った。

お仕事お疲れさま、わたし。さあて、ゆっくり眠りましょう。

少しだけ気持ちを高揚させて、足を池の深部に進めていく。冷たい水が、速やかに体温を奪っていく。

ほらね、気持ちいい……。わたしは、水の……底に……向かって……。

身体が『宙』に浮いていく。

最後に見た光景。それはいつもの暗い水底ではなく、黄金のように輝く水面だった。

雪蓮らが小沛の街を去って一週間が経った。慶次郎は街を出る準備にとりかかっていた。そろそろ、この大陸を見て回りたい。手元に何もない状況では、今から少しずつ準備せねばままならない。そして、まず必要なのは　。

「馬、だな」

慶次郎は、いつもの敷物の上で考える。慶次郎は大きい。たいて

いの馬は、一日で乗り潰してしまう。松風と出会ってから、至福の時間が続いた。だが、それは奇跡に近いめぐりあわせ。そして現実問題として、馬は高価である。それは、この後漢末の世でも変わらなかった。

正直、現在の警備係兼お留守番の賃金程度では話にならない。忍びの出身の慶次郎ならば、馬泥棒ぐらいはたやすい。しかし、流石にそれははばかれた。

からん。

入口の鐘が鳴った。いつもの酒屋であろう。馬を買う金はなくとも、週に一度の酒の注文は欠かさない慶次郎である。

「勝手に入られよ」

「おじゃまする」

「ん？」

現れたのは、白髭の老人であった。つると頭のはげた、いかにも人の良さそうな。そんな老人が、にこりと笑って慶次郎に問う。

「前田慶次郎殿のお宅ですか」

「いかにも」

「……天の御遣いと噂があった」

「あつたようですな。噂でしたが」

「ふふふ」

「ははは」

二人は微笑み合う。

なかなか食えない爺さんのようだ。慶次郎はお茶を入れるために立ち上がった。

「ここが臥牛山かね」

慶次郎は、岸壁を見上げてつぶやいた。目の前には、幅は広いが水量は少ない滝がさらさらと落ちていく。山頂にある鏡池という名の池から流れ出す滝だと聞いた。その滝壺の前に、慶次郎は馬と共にいる。

慶次郎は今、松風ほどとは言えないまでも、馬体の大きな馬に乗っている。老人から引き受けた仕事の先行報酬であった。過去に、良く似た馬を知っている 『野風』と名づけた。

老人は小沛の街の長老と名乗った。曰く、ここから西にしばらくいくと、臥牛山という山がある。その頂上には、霊水を満たすといわれる池がある。小沛の街の人々にとって、なくてはならない場所だ。

だが、最近妙な噂が立っている。『物の怪』が出るというのだ。実際に、見た者もいる。もっとも、そのあまりの恐ろしさに、姿をはっきりと覚えている者は一人もいなかった。とにかく『巨大な何か』で、『恐ろしく速い』らしい。

今や、誰もそこに行かなくなった。しかし、霊水がなければ助からない病人もいる。対策を取るには、物の怪とは一体何なのかを誰かが確かめなくてはならない。そして、もしそれが存在するのなら

ば退治しなくてはならない。

しかし、その目撃者の話を聞いて、誰もその役を担おうとはしなかった。霊水の池ににいるという物の怪　崇られでもしたらどうするのか。

「なるほど。その点、小沛の街とは縁もゆかりもないのわしならば、死んでも祟られても痛くもかゆくもない、と」

「そこまでは言っておりませぬ。が、そのような考えもありますな」「食えぬ爺いだ」

「年寄りをいじめますな」

笑い合う二人。実のところ、慶次郎はすっかりその気になっていた。屋敷にこもって一カ月と少し。身体が動きたくてうずうずしている。得体の知れぬ物の怪を見てこいというのもいい。

「では、報酬を決めよう」

「何をお望みですか」

「馬。わしが乗れるような大きな馬だ。そして地図。この国全体が載っているような」

「かしこまりました」

「先行報酬だ。馬を先に渡してもらえぬか。その方が、早く片が付く」

「そうですね。それではさっそく」

次の日の朝、馬が届いた。久しぶりの愛馬に、慶次郎の顔もほころぶ。その日のうちに準備を済ませると、すぐさま慶次郎は出立した。そして今、臥牛山の前に立っている。

「これでは……登れぬな」

急勾配の崖が目の前にある。体重の重い慶次郎は、登攀は苦手であった。捨丸や骨がいれば。

「どうなすった、大将」

振り返る。そこには黒光りする大きな「牛」がいた。

「大将。ここからじゃ無理だ。山に登るには、反対側にある山道を使わなきゃ」

牛が言う。

慶次郎よりも、背が高い。

慶次郎よりも、幅が広い。

慶次郎よりも、重そうだ。

慶次郎よりも、ずっと黒い。

その牛のような大男は、周倉と名乗った。

「わしの名は、前田」

「別に、大将でいいだろ、大将」

「まあ、よかろう」

どうやら、小沛の街へ買い出しに行った帰りのようだ。大きな荷物を背負っている。そういえば、四半刻（三〇分）程前に荷物を引いた大きな牛のようなものを追い抜いた覚えがあった。久しぶりに馬に乗るのが楽しくて、気にも留めていなかった。

「山道か。ここから、どのくらい掛かる？」
「そうさな。馬ならここからぐるっと回って半刻（一時間）ぐらいかな。そこから登ってまた半刻か」
「うーむ」

今、臥牛山を牛に例えれば頭の方にいる。馬で登るには、牛のしっぽの方にある山道から入る必要がある。遠くからはっきり見える山なので、山だけを見て進んできたのがあだになったようだ。目の前に山がある以上、さっさと登りたいのだが　慶次郎は目の前の滝を見て、ふと思った。

「ん？この滝の水は鏡池とやらから落ちてくるのだったな」

「さようで」

「だったら、別の上まで行かなくても、ここで霊水とやらを汲めば良いのではないか？」

周倉は首を振る。大きな首が振られると、ぶーんぶーんと音がするよつな気がする。

「大将。こういうものは、『上』にあるからいいんですぜ。『下』に落ちてくるものはダメなんですわ」

「なるほど。病は気から、というわけかね」

「ちよつで」

ふんふん、と慶次郎はうなづく。

「で、おぬしはどこに住んでいるのじゃ？」

「……山の中腹に。ほら、あそこら辺です。そこで畑を耕してます」「ずいぶんと高い場所にあるのう。なんで、そんなところに」

「あそこならば、うるさいお役人も来ませんからな。……内緒ですぜ」

「なぜ、そこまでわしに話す」

周倉はにやりと笑った。

「お仲間だからですよ」

「お仲間？」

「大将は『侠』でしょう」

「……」

「わかる者にはわかりますよ、大将。どごその、名のあるお方では？」

慶次郎は、苦笑した。今の慶次郎は、この国のいわゆる庶民の服を着ている。にもかかわらず、目に見える肌のいたるところには傷が刻まれていた。そのことが、周倉のそうした解釈につながったのかもしれない。街の人々の視線はそのことも意味していたか。と今さらのように思う。

慶次郎はその問いには答えず、とりあえず軽く頭を下げた。

「すまん」

「へ？なんで大将が謝るんで」

「おぬしが山道の入口ではなく、『ここにいる』理由を教えてくださいのだから？」

「へっ？」

「あそこまで登るには、滝の後ろに行けば良いのかね」

周倉は目を丸くした。

慶次郎はもう一度言った。

「すまん」

「大将にはかなわねえよ」

周倉は苦笑いをすると、滝壺の側にある木をアゴで指す。慶次郎は、その木に素早く野風をつないだ。

それを見た周倉は、滝の裏側に向けてゆっくりと歩き出した。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4214x/>

恋姫十無双・慶次伝 ～空の彼方に～

2011年10月31日01時24分発行